

アムールの風

● 第3回

田中健之
(黒龍會 会長)

正統右翼の論理

第一章

すべては国民を守るために

明治政府に抗った人々②

——肉体言語という叫び——

明治時代には、保安条例という法律があり、現在の日本からは想像できないほど、言論の自由がありませんでした。

保安条例は、明治二〇（一八八七）年十二月二十五日に制定、発布されて、即日施行された勅令です。この条例は、自由民権運動を弾圧するための法律で（明治三十一年六月二十五日廃止）、秘密の集会および結社を禁じており、内乱の陰謀、教唆、治安の妨害をする恐れがあるとされた自由民権派の人物は、同条例第四条の規定に従って、皇居から三里（約

十一・八町以外に退去させられました。そして三年以内の間その範囲への出入りや居住を禁止されました。

しかしそれに屈せずに、自分自身の覚悟を持った行動を通して、己の主張をしていく、政治活動家としての正道を歩む人物もいました。

その代表的な事柄に、大隈重信外相が断行しようとした不平等条約改正を阻止した、玄洋社の来島恒喜の直接行動があります。今日これは、一般的にはテロだと言われていますが、誰も来島にテロを勧めてやらせたわけではありません。

当時、大隈外相が断行しようとしていた条約改正は、外国人の判事を起用するというものでした。

この条約改正が施行された場合には、

- 一、我が自主権を毀損すること。
- 二、憲法の精神に造反すること。

三、行政の大権を汚穢すること。

四、治外法権の撤去を期し難きこと。

五、内治干渉の門を開くこと。

六、一切課税の権を得ざること。

という理由によって、それは日本の独立を危うくするものだと、国の朝野を挙げて反対していました。

当時は、議会といっても、まだまだ未成熟でした。大隈外相が、一人で条約改正を決めて、それを断行しようとした事から、その条約改正を阻止して、日本の独立を守るためには、大隈を葬るしか方法はなく、「大隈を倒して、自分が死ぬしかない」と考えた志士こそが、玄洋社の来島恒喜だったのです。彼が、直接行動をする実行場所として選んだのは、外務省前でした。

明治二十二（一八八九）年十月十八日、閣議を終えて、馬車に乗って外務省にやって来る大隈重信に目がけて、来島は爆裂弾を投擲します。大隈は右足が飛んだだけで幸い生命を落さず生き残ります。右足を失脚した大隈我によって大隈重信が外相を文字通り失脚したため、条約改正を阻止することが出来ました。

一方、来島恒喜は、その場で皇居を遙拝して、持参した短刀で自らの首を刎ね、壮烈な自決を遂げます。人を殺めたなとここで、来島恒喜の墓所は、福岡の玄洋社墓地の他にも東京・谷中にもあり、遺髪が埋葬されています。そこに建立された墓石に刻まれた名は、来島の生前に親交があった、勝海舟の揮毫に依るものです。もつともその墓石は、時代を経て亀裂が生じたために、昭和十三（一九三七）年十月十八日、来島恒喜の五十回忌を機に、頭山満の揮毫による墓石が新たに建立され、勝海舟の筆による旧墓石は、横に寝かせて安置をしました。

ところで、墓の隣に建つ常夜灯には、「暗夜之燈」と、やはり勝海舟の文字によって刻まれています。まさに勝は、来島の気概を世に伝えようとしたのです。これを知った官憲は、その影響を恐れて、文字を削るように石工に命じました。しかし、来島恒喜の行動を意気に感じた石工は、文字がかすかに読み取れるように意識して削ったのです。

このように日本国民の大多数が、来島恒喜の行動を支持してきました。まさにそれは「テロ」ではなくて、「肉体言語」による義挙であったと言った方が、正確な表現だと思います。もちろん彼の蹶起は、関係のない人民を巻き込んだ、無差別なテロではありません。

政治に責任がある者に対してのみ、その責任を問うだけの行動です。そのためには自分も生命を懸けるのです。

らば、自分は死ななければならない、という覚悟の上で、彼は行動したのでした。

蹶起に際して来島は、玄洋社が官憲に弾圧されて、多数の連座を出さないようにという配慮から、玄洋社を脱退し、養子先の的野家とも離縁して来島姓に戻りました。

従って、玄洋社からは、誰一人として連座を出さずに済みました。

ところで、来島恒喜から爆裂弾を投擲された大隈重信は、彼の生きざま、死にざまを意気に感じて、「赤穂浪士よりも、あつ晴れだ」と、来島を讃えていました。彼の葬儀の際に大隈は、花輪を届けた上、法事にも参加していました。

故郷の福岡で行われた来島恒喜の葬儀には、千人以上の人々が参列しました。頭山満は、「天下の諤々は君の一撃に如かず」と、一言弔辞を述べました。

後に誰が作ったのか定かではありませんが、次のような俗謡が、九州一円で多くの人々に流行していました。

「今度の条約改正についてネー、数多男のある中で、私の好きな来島さん。同胞四千万人の、難儀をその身に引き受けて、パツと投げたる爆裂弾、そのまま自殺の勇ましき、人間わずか五十年、どうせ一度は皆死する、とても死ぬならヨーホホイ、エー国のためにネー」

即ち、「泣いて馬諷を斬る」、そこには、涙の剣があるのです。つまり個人的な恨みはないが、大義のために天誅を下す一筋の行動です。

当時の政治家は、殺されることを覚悟して、政治の表舞台に立っていました。また、その政治家を批判する者も、自らの死を覚悟し意見を言い、抗議をしたものです。

政治家を批判する者も、政治家として批判される者も、お互いが身体を懸け、死を覚悟し、その信念を貫いたのです。共に国を思い、憂うるが故の、堂々たる政治姿勢であったのです。

戦後、戦勝した連合国が、敗者である日本を私刑する復讐劇が、極東軍事裁判です。

この裁判において、A級戦犯として唯一軍人ではなく、文官として起訴され、死刑に処せられたのが、広田弘毅元首相でした。

日華事変の勃発当時に外務大臣だった広田は、戦争には極めて消極的で、むしろ否定的だったにも関わらず、A級戦犯として起訴されたことに対して、周囲は衝撃を受けました。本来ならば、近衛文麿元首相がA級戦犯として起訴されるはずでしたが、近衛元首相は、裁判が始まる前に自殺してしまっただけに、その員数合わせのために、A級戦犯として

起訴されたのが広田でした。その理由は、広田が玄洋社員であつたからでした。

広田の弁護人らは、彼が無罪なることを信じて、弁明をはっきりと言うべきことを彼に進言していました。しかし広田は黙して語りませんでした。

彼はこの裁判が、勝者が一方的に敗者を裁く私刑であることを重々に承知していたからです。

「自分が何か言い訳をして、例え死刑を免れたとしても、別の誰かが犠牲になるであろう。それならば自分が犠牲になって済むのであれば、自分は黙って死のう」

と、広田は新しい人に語っていました。

占領軍が広田を極刑に処することに對して、彼の妻、静子は服毒自決をして、GHQに對する無言の抗議をしました。

広田は、一足先に往つた妻に對して、獄中から手紙を出し続けました。

静子の父上は月成功太郎つきなりこうたろうといつて、玄洋社結成以来の古参社員でした。実は月成は、来島恒喜と共に、大隈重信が断行しようとしていた条約改正を阻止するために、蹶起をする覚悟を固めていました。

しかし来島は、妻子がいる月成をなだめて、独り身である自分が一人で、大隈に天誅を加えることを主張しました。

巡り、上野宏史厚労政務官(令和元年当時)の入管に對する口利きと、その見返りとして人材派遣会社に對する金銭要求疑惑など、政治腐敗が著しく目立っています。

また、新型コロナウイルスが流行する今日、感染阻止対策をはじめ、失速する経済政策に苦しむ国民救済策の緩慢さ、国民の血税を無駄使いして、役に立たない、それも不良品が目立つマスクの配布など、危機管理意識の欠如によつて、後手後手に回る無策な安倍政権の国民に對する責任を我々は、徹底的に追及する必要があります。

やはり政治家として、国民から選ばれた人物は、生命を懸けて、自らの言動に責任を取るからこそ、国会議員や閣僚になれるのであつて、生命を懸けて自らの言動に責任を持たず己の政治的信念を貫いて死ぬ覚悟がない者が、軽佻浮薄けいちょううはくに国家権力の中枢に在ること自体が国を危うくするものなのです。

思想信条に関わる事とか、国益に関わる事とかは、政治家が生命を懸けてやるべき事です。否、断じてやらなければなりません。ところが、今は著しく政治家は低次元で、金を貰つたとか貰つてないとか、愛人がいるとかいないとかで、世論が騒ぎ立っています。明治から戦前にかけては、そんな愚かな政治家は、国民の義憤から問答無用で天誅てんしゅうが下され、その肉体は、物理的に地球から消し去られてしまつたはずで

鬼神も壮烈に泣く、来島恒喜の生きざまを、月成は、次女の静子が幼い頃から、繰り返しその話して聞かせていました。また、子どもの頃から玄洋社の明道館道場めいどうくわんで柔道を学んでいた、少年時代の広田弘毅にも月成は、同様の話しをよくしていました。広田も静子も生涯その心の中には、来島恒喜の魂が生き続けていたのです。広田弘毅夫妻の最期は、まさに身を殺し仁と成す(殺身成仁)という、玄洋社の精神を象徴するものでした。

来島恒喜烈士や広田弘毅元首相の生涯を想つた時に、今日、白装束を着て街頭に立ち、自らの信念を貫くことによって、誰かに殺されても構わないという覚悟を以つて、自らの志操しじょうに殉じる事ができる国会議員が、果たしてどれ位いることでしょうか？

恐らくそんな覚悟を持った議員は、皆無ではないのかと思ふのです。彼らは警察に守られて、臍首くびにもならないから適当に議員を続け、在職中にどれだけ稼ぐことができるのか、というような野心を抱いている議員が大多数なのではないでしょうか？

安倍政権は、「森友・加計問題」や「桜を見る会」問題、黒川弘務検事長の賭麻雀問題、河井克行前法相夫妻による選挙票取りまとめ買収事件、それに外国人労働者の在留資格取得を

す。

政治家の愛人スキャンダルというものは、相手の女性の気持ちを与えず、泣かすからスキャンダルになるのであつて、元からその政治家が愛人を持つような器はなく、要はその政治家が小粒な証拠です。伊藤博文や桂太郎などは愛人がいましたが、相手の女性を大事にしていて、泣かせませんでした。男としてきちんと責任を取っています。またそれはそれで、あつ晴れでしょう。

これらの問題は、当人の器があれば、内側から火が吹く問題ではありません。そういう問題が生じるのは、女性を粗末にして泣かせているからです。

そういう輩やぐらが、国民を救えるかといえは、断じて救えるはずはありません。

私は、政治家に愛人がいる事が悪い、などと言う朴念仁ぼくねんじんではありません。人間には、情があつて然るべきですし、様々な個人的な事情があることでしょう。ただし妻や愛人を泣かす男は最低です。

自分の妻も愛人も大事にできないで、泣かすような政治家が、果たして国民を救うことができるのか、国民を幸せにすることができるとか、その事を私は強調したいのです。

つまるところ女性に對する欲望だけで、愛情の欠片かけらもない

輩が、国家や民族、国民を愛することはできるはずがないからです。そういう輩は国民を救い、幸福にすることは絶対にできるわけがありません。

——家業でやっている政治家——

昔であれば、一人の政治家を倒せば、国の政治が変わりました。言論の自由もなかった明治から戦前にかけては、愛国者が一人一殺という肉体言語によって、己の命を犠牲にして、国を害する政治家に対して天誅を加えて、国を救ったのです。

しかし、己の命と引き換えに殺すに値しない輩が、今日の政治家どもです。彼らは「輩」です。その類が雨後の竹の子の如く永田町に存在しているのです。そうした輩が国民の税金で食っている。そんなのは政治家ではない政治屋、否、「詐欺師」の類です。「詐欺師」は犯罪者ですから、罰せられて当然の輩です。

一部の愛国的政治勢力から、国会議員は、「永田町のウジ虫」だ、と蔑称べつしょうされています。国民の代表であるべき国会議員が、「永田町のウジ虫」と国民から呼ばれるようでは、世も末です。

「永田町のウジ虫」程度のそんな輩に対して、国民が怒らな

が発言したことによって殺されるかもしれない、という真剣な覚悟で政治家は己の信念に殉ずるべく、発言したものです。従ってその発言には、国を左右する重みと責任がありました。政治家を殺す側も相手を倒した後は、自決する決意と覚悟を以って、蹶起くわつきしたのです。

そこには貴い命と命のやりとりがありました。まさにそれは、責任とケジメを天下に示したのです。

しかし今の政治家は、責任の取り方やケジメのつけ方を全く知らないのです。だから彼らは、国を私物化するのです。国を売るような政治家に対して、私は天誅を加えるべく、肉体言語による実力行使もやむを得ないと思っています。国を救うためには、そういう生命懸けの責任の取らせ方、ケジメのつけさせ方を、国民が政治家に突きつけたいといけません。それは国民の政治的な権利の行使に他なりません。

国民が政治家に責任を取らせ、ケジメをつけさせないから、戦後の政治において、体制側の人間が、権力に胡坐あぐらをかいてズルズルと議員を続けてきたわけです。

そこには日本を敗戦に導き、天皇陛下と国民に対する政治家の責任を問わなかったことも起因しています。それが今日、無責任な詐欺師の如き政治屋が跋扈はつごし、蔓延まんえんしている所以ゆえんです。そうした輩が、さも「国会議員でいごいご」といって、

いことはおかしい事です。

私は口を酸すっぱくして言っていますが、かつてのように生命懸けで政治をやっている政治家が、今日はいないのです。現在の議員連中の大勢が、家業として政治家をやっているだけなのです。

国民の苦しみや悲しみを知らない輩が、家業が政治家だからと言って、代々その地盤を受け継いで、選挙の事だけしか考えていない。そういう輩は、果たして本物の政治家だと胸を張って言うことができるのでしょうか？

彼らは、政治家じゃなくて、政治屋になっているだけです。彼らは、単なる祖父や親からの家業を継いでいるだけです。

彼らは、企業から金を貰ったり、パーティー券を買ってもらったりして、大資本の代弁者として、その言いなりになっているだけです。永田町に巣食う詐欺師的な国会議員は、国民から怒りを買って、「永田町のウジ虫」呼ばわりされても当然です。

国会議員に対して、国家と国民に対する責任とケジメの取り方をしっかりと、国民の側から教えるべきです。

私は、テロを必ずしも肯定するわけではありませんが、昔は、政治家を殺す側も、政治家として殺される側も、国家国民のために生命懸けだったことは前に述べた通りです。自分

バッジを付けて、踏ん返り返っているのです。自分たちは捕まったり、殺されたり、辞めさせられたりしないために、傲慢ごうまん極まりない態度で国民を愚弄ぐろうしているのです。

昭和五(一九三〇)年、昭和維新の号砲とも言うべく、東京駅で濱口雄幸首相を狙撃した佐郷屋留雄は、「一発の銃声は十萬の動員に勝る」との言葉を遺しています。また、「一人一殺」という精神の下、井上準之助蔵相と團琢磨三井財閥の総帥の連続暗殺を指揮した血盟団の盟主、井上日召は、「一殺多生」と言っています。「一殺多生」とは、「多くの善なる人々を助うために、その善なる人々を苦しめている一人の悪人を殺す」という、仏教用語です。本来は優しいはずの御仏も、憤怒の形相となって邪鬼を踏み殺して、人々を救済するので

——国民が政治を監視する

仕組みの確立を——

選挙によって、自分が選んだ議員がどういう行動をしたのかということ、国民自身が監視する仕組みが必要です。

国民は自分が選んだ議員に対して、選んだ責任として彼らを監視する義務と責任とがあるはずで、その責任と義務を

果たすべく、年に一回、〇×方式でこの議員は公約を守っているのか？また政治家として適正なのか？ということを国民投票によって問うようにしなくてはなりません。

例えば、二回×がついた場合には、国会議員を罷免し、その公民権を剥奪^{はくたつ}できるような、そんなシステムを作らなければなりません。しかし、今はそれがありません。

政治家に対する国民の怒りが、国家の発展と安寧にとつては大事なわけですが、今日の日本では、国民が体制側によってブライラー化され、政府に対する国民の怒りは、残念ながら去勢されてしまいました。

七〇年安保闘争以降、自民党政府はバブル景気を契機にして、国民を軽佻浮薄に浮き足立たせ、そこで流行したのはディスコをはじめ、意味不明な無国籍文化、それも海外の下層な底辺文化みたいなものに、若者たちは踊らされているのです。日本の精神、文化、伝統は、大資本家によって、遅れたもの、格好が悪いものだとして、破壊されてしまいました。

某保守系新聞社グループのテレビ局は、女子大生ブームを作り上げて、親の脛齧^{すねかじ}りの女子大生を裸同然の水着姿をさせてた上で、サイパン島で水着美人コンテストをやる有様^{ありさま}です。日本人が玉砕したサイパン島は、大和撫子がアメリカ兵から貞操を守るために、断崖絶壁から身を投げて自決^{じけつ}をした、殉

国の鳥です。日本人が国を護るために玉砕、犠牲になった戦争の悲史を想起して、本来ならば、鎮魂と日本再建の祈りを捧げなくてはならないサイパン島において、そんな馬鹿げたコンテストを大人が学生を使って、金儲けのためにやるわけです。このように本来ならば許されざる事が、バブル経済期にはずっと許されてきたのです。

そういう時代だったからこそ、オウム真理教のようなカルト宗教集団が、日本で勢力を拡大して行く土壌を醸成する事になったのです。そこには、そうしたバブルの軽佻浮薄な社会に付いていけない、若者たちの怒りと反逆があつたわけです。そうした意識こそが、彼らに何らの罪悪感を持たせず、オウム真理教による無差別殺人であるサリン事件の主役となったのです。

まさにそれは、現代日本の社会病理現象を象徴する大事件として歴史に刻まれました。



田中 健之 たなか たけゆき

歴史作家、維新運動家、昭和38年11月5日生まれ、福岡市出身。
文洋社初代社長平岡浩太郎の重孫で、黒龍会を創立した内田良平の血脈遺徳を継承する親族、拓殖大学日本文化研究所近現代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所及びモスクワ国立教育大学外国語学部客員研究員。
日露書院協会の会長。2008年に黒龍書を再興し会長に就任。
主な著書に『靖国に祀られる人々』、『昭和維新』『北朝鮮の終焉』、『実は日本人が大好きなロシア人』『横浜中華街』など。中央公論「正論」、『歴史群像』などの論評誌に多数執筆。